

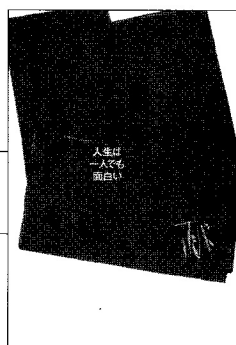
篠田氏の「一人で自由に生きる」という指針は、社会化重視の教育の価値観と一線を画している。彼女は、生涯一人身で、

美術家団体にも属さず、墨を用いた抽象表現主義者として活躍しており、今でも人生の楽しみは無尽蔵だと言

う。人という漢字は、「人が支え合う」のではなく、古来の甲骨文字では、一人で立ち、両手を前に出して、何かを始めようとしているのではと彼女は言う。

また、歳をとると、過去を見る目に変化が生まれ、肯定、否定の両面が生じ、あきらめと悟りが生ずる。彼女は、これを、高いところから自分を俯瞰する感覚だと言う。個人化社会における「無所属」「悟り」の若者と通じるところがあり、若者や退職を控えた教員にとって参考になると思われる。

「結構」という言葉は、良いと



篠田桃紅 著

1080円 幻冬舎
03-5411-6222

一〇三歳になってわかったこと
～人生は一人でも面白い～

いう意味と、いらないという意味が同居している。彼女は、これを、余白を残し、臨機応変に加えたり減らしたりすることのできる「いい加減」という言葉と同様の日本文化の良さだと言う。西欧流の自己主張の教育ばかりが良いのではないかもしれない。

そのほか、常識に生きなかつたから長生きできた、ほかに頼らずに自分の目で見る、人生を歳で決めたことはない、規則正しい毎日から自分を解放する、などの含蓄に富む言葉があふれている。とりわけ、「自由と個性を尊重するから孤独」かつ「コミュニケーションが大切」、孤立ではなく、人と交わらないのもなく、混じらない、よりかからないという考え方は、仲間と群れたがる若者にとっても組織の一員としての教員にとっても、個人化社会を充実して生きていくための根源的な示唆を与えてくれよう。

(聖徳大学教授・西村美東士)